

水産新聞

発行日

2016年

8月12日(金)

発行者

幸田 怜奈

京都大学舞鶴水産実験所
を訪ねて

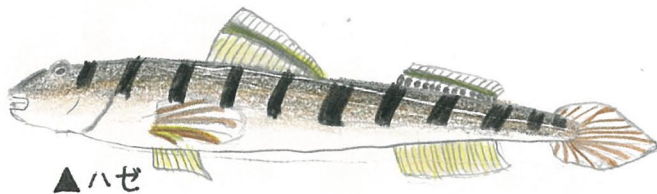
8月10日、舞鶴市にある、京都大学舞鶴水産実験所に行ってきた。ここでは、魚類をはじめとする水生生物の生態、生理、行動分類および水産学や環境学に関する教育研究活動を行っている。



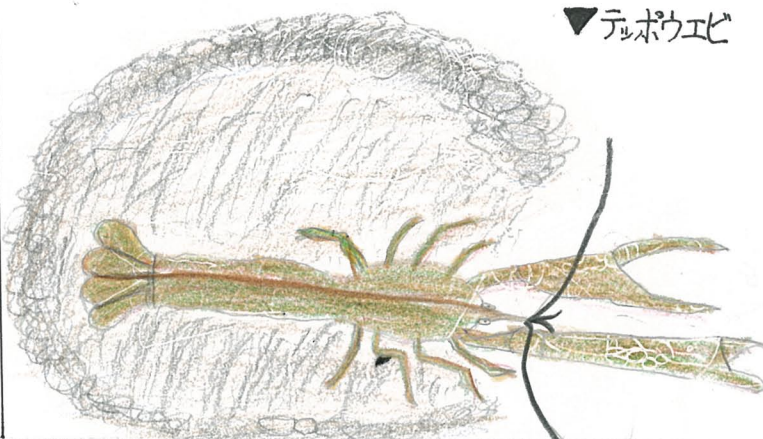
▲京都大学舞鶴水産実験所
(日本海側にあり、ただ一つの大学水産実験所)

共生について

益田れいじ先生の話では、共生について教えてもらった。例えば、スジハゼとテポウエビは、エビが巣あなをほり、スジハゼが見はり番としてエビにきけんを知らせる。



▲ハゼ



▼テポウエビ

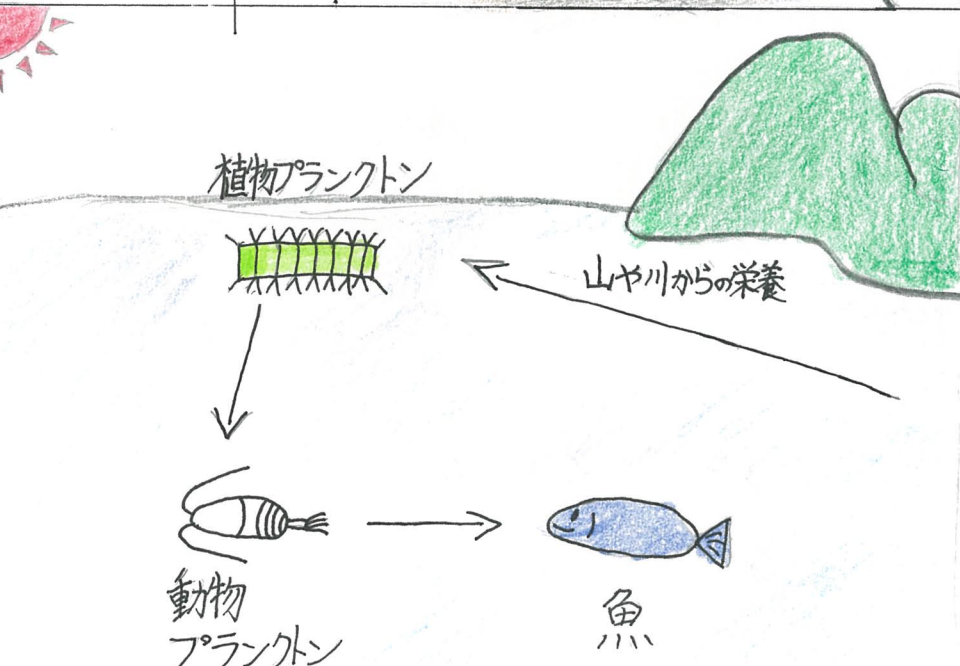
共生とは

共生の意味はいっしょに生きていく事。とくに、ちがった種類の生き物がいっしょに生活する事。

自然のつながり

左の絵は、まず、山などの栄養を植物プランクトンが食べ、動物プランクトンが、植物プランクトンを食べ、魚が動物プランクトンを食べるというしくみです。

このようなことから、山などの栄養が十分でない、魚は、生きることができないということが分かりました。(益田先生の説明)
豊かな山や川が必要だと思いました。



舞鶴水産実験所

飼育棟にて

すぐ横の舞鶴湾からくみ上げた海水をろ過槽に通してきれいな海水を使って魚を飼育しています。

ここでは、マダイやヒラメ、アジの稚魚、ヒトデ、ナマコなどが、研究用としていました。



竜宮浜

磯観察にて

竜宮浜では、イトマキヒトデ、ミズクラゲ、ヤドカリ、アメフラシなど、見つけることができました。



▲ ヒラメの稚魚

魚付林

魚付林についても教えてもらいました。魚付林とは魚が集まってきやすさやすいように、海岸、川岸などの近くに作られた森林のことです。

魚付林がある方が、栄養がたくさんあり、魚が育つことから、自然が大切だと知りました。

竜宮浜でさい集した物

